

シェイクスピア英語における 語順倒置のメカニズムについて

小 川 勉

0. はじめに

シェイクスピア（1564-1616）は言葉の達人であり、その英語は多くの言語学者達によって、統語論、意味論、音韻論、形態論の分野で、文献学的及び理論的アプローチにより研究されている。しかしながら、形式的諸特徴（例えば倒置）は文献学的アプローチが主であり、理論的にかつ体系的に分析している研究はほとんどなされていない。本稿では、形式文法（統語）理論の枠組みを用いてシェイクスピアの英語の分析を行う。

本論文では、初期近代英語期のシェイクスピアの英語において観察される様々な語順倒置を、主に現代英語および現代日本語の分析に提案されている「生成統語理論」を用いて分析し、その派生の過程を構造的に記述し、基本語順から語・句を移動させる（倒置）操作について体系的に分析する。

データについては、語順倒置を以下の2つのパターンに分類し、パターン(a)のみを考察の対象とする。パターン(a)は、要素 a の倒置に加え、要素 γ の倒置が要素 a の倒置とどのような関係にあるかを解明する必要があるためである。

- (1) a. 要素 a が基本となる位置から節頭に移動すると同時に、要素 β （ β は2つ以上の場合も含む）も基本となる位置からその左側

に移動する場合。

- b. 要素 a が基本となる位置から節頭に移動するが、その他の要素は基本となる位置から移動しない場合¹⁾。

先ず第1節では、倒置構文の派生構造について考察する。次に第2節では、それぞれの倒置を引き起こしている要因について検討する。そして最後に本稿のまとめと今後の検討課題について述べる。

1. 倒置構文の派生構造

本節では、2つ以上（前節の(1)の a と β ）の要素が基本となる位置から左側に移動する場合を考察する。以下、節頭に移動している要素(a)はイタリック体で示し、それ以外の位置に移動している要素(β)には下線を付すことにより区別する。

1. 1. a が目的語として機能する名詞句の場合

目的語名詞句が節頭に移動すると同時に、その他の要素も基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動しているデータが観察される。

1. 1. 1. β が法助動詞の場合

目的語名詞句の節頭への移動と同時に、法助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

(2a) Hamlet. Look you, these are the stops.

Guil. But *these cannot* I command to any ut'rance of harmony. (HAM 3.2.361)

この例において、目的語 *these* (= a) が動詞 *command* の後の位置から節頭に移動し、同時に助動詞 *cannot* (= β) が主語 I の左側に生じている（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は以下であると考えられる。

(2 b) $these_j$ $cannot_i$ I t_i $command$ t_j to any utterance of harmony

以下、特に注目すべき特徴がない場合は、データ (a) およびその派生構造 (b) のみについて記述する。

(3 a) Hor. So shall you hear carnal, bloody, and unnatural acts, Of accidental judgments, casual slaughters, Of deaths put on by cunning and [forc'd] cause, And in this upshot, purposes mistook Fall'n on th' inventors' heads: *all this can* I Truly deliver. (HAM 5.2.385)

(3 b) $all\ this_j$ can_i I t_i truly deliver t_j

(4 a) Oth. My life upon her faith! Honest Iago, Honest Iago, *My Desdemona must* I leave to thee. (OTH 1.3.295)

(4 b) $my\ Desdemona_j$ $must_i$ I t_i leave t_j to thee

(5 a) Iago. *More of this matter cannot* I report. (OTH 2.3.240)

(5 b) $more\ of\ this\ matter_j$ $cannot_i$ I t_i report t_j

(6 a) Kent. Alack, bare-headed? Gracious my lord, hard by here is a hovel, *Some friendship will* it lend you 'gainst the tempest. (LR 3.2.62)

(6 b) $some\ friendship_j$ $will_i$ it t_i lend you t_j 'gainst the tempest

(7 a) Lady M. ...*his two chamberlains Will* I with wine and wassail so convince, (MAC 1.7.64)

(7 b) $his\ two\ chamberlains_j$ $will_i$ I t_i with wine and wassail so convince t_j

(8 a) MAC. Who is't that can inform me?

Hor. *That can* I, (HAM 1.1.80)

(8 b) $that_j$ can_i I (inform) t_i t_j

(6)においては、動詞 *lend* とその直接目的語 *some friendship* の痕跡との間に、間接目的語 *you* が存在している。すなわち、直接目的語は間接目的語も飛び越えてその左側に移動していることが観察される。(7)においては、主語 *I* と動詞句 *so convince* との間に前置詞句 *with wine and wassail* が存在している。すなわち、目的語 *his two chamberlains* も飛び越えてその左側に移動していることが観察される。(8)においては、目的語 *that* が先行する文ですでに旧情報となっているために省略されている *inform* の後の位置から節頭に移動し、同時に助動詞 *can* が主語 *I* の左側に生じている。

1. 1. 2. β が完了の助動詞 *have* の場合

目的語名詞句の節頭への移動と同時に、完了の助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動（主語助動詞倒置）しているデータが観察される。

(9 a) [1.] Serv. Hold your hand, my lord! I have serv'd you ever since I was a child; But *better service* have I never done you Than now to bid you bold.
(LR 3.7.74)

この例において、目的語として機能する名詞句 *better service* が基本となる節の最後の位置から節頭に移動し、同時に助動詞 *have* が主語の左側に生じている。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(9 b) *better service*_j *have*_i *I* _{t_i} *never done you* _{t_j}

その他のデータとして以下のものが観察される。

(10a) Lady M. ...‘Thane of Cawdor,’ by which title, before, these weird sisters saluted me, and *referr’d* me to the coming on of time with ‘Hail, King that

shalt be!' This have I thought good to deliver thee, my dearest partner of greatness, (MAC 1.5.10)

(10b) this_j have_i I t_i thought good to deliver thee t_j

(10)において、動詞 *deliver* とその直接目的語 *this* の痕跡との間に、間接目的語 *thee* が存在している。すなわち、直接目的語は間接目的語も飛び越えてその左側に移動していることが観察される。

1. 1. 3. βが迂言助動詞 do の場合

目的語名詞句の節頭への移動と同時に、迂言助動詞 *do* が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に生じている（主語助動詞倒置）しているデータが観察される。

(11a) Oth. I gave her such a one; 'twas my first gift.

Iago. I know not that; but *such a handkerchief* (I am sure it was your wife's) did I to-day See Cassio wipe his beard with. (OTH 3.3.438)

(11)において、目的語名詞句 *such a handkerchief* が基本となる従属節内の動詞句に含まれる前置詞の目的語の後の位置から節頭に移動し、同時に時制を担う助動詞 *did* が主語 *I* の左側に生じている（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(11b) such a handkerchief_j did_i I today t_i see Casio wipe his beard with t_j

次のデータは節頭への倒置を含め3つの要素が倒置している興味ある例である。

(12a) Oth. *That handkerchief* Did an Egyptian to my mother give; (OTH

3.4.56)

(12)において、直接目的語名詞句 *that handkerchief* が基本となる動詞句の目的語の位置から節頭に移動し、同時に時制を担う助動詞 *did* が主語 *an Egyptian* の左側に生じ（主語助動詞倒置）、更に間接目的語 *to my mother* が動詞の左に生じている。

関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(12b) that handkerchief_j did_i an Egyptian to my mother_k ti give t_j t_k

その他のデータとして以下のものが観察される。

(13a) King. O, speak of that, *that do* I long to hear. (HAM 2.2.50)

(13b) that_j do_i I t_i long to hear t_j

(14a) Oth. Look here, Iago, *All my fond love thus do* I blow to heaven. (OTH 3.3.445)

(14b) all my fond love_j thus do_i t_i blow t_j to heaven

1. 1. 4. βが動詞場合

目的語名詞句の節頭への移動と同時に、動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に生じている（主語動詞倒置）しているデータが観察される。

(15a) Ham. No, nor mine now. [To Polonius.] My lord, you play'd once i' th' university, you say?

Pol. *That did* I, my lord, and was accounted a good actor. (HAM 3.2.100)

(15)において、目的語として機能する名詞句 *that* が基本となる動詞の後の

位置から節頭に移動し、動詞 *did* が主語の左側に生じている（主語動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(15b) $\text{that}_j \text{ did}_i \text{ I } t_i t_j$

その他のデータとして以下のものが観察される。

(16a) Hor. Two nights together had these gentlemen, Marcellus and Bernardo, on their watch, In the dead vast and middle of the night, Been thus encount' red: a figure like your father, Armed at point exactly, cap-a-pe, Appears before them, and with solemn march Goes slow and stately by them; thrice he walk'd By their oppress'd and fear-surprised eyes Within his truncheon's length, whilst they, distill'd Almost to jelly with the act of fear, Stand dumb and speak not to him. This to me In dreadful secrecy impart they did, (HAM 1.2.206)

(16)において、目的語名詞句 *this* が基本となる位置である動詞の後から節頭に移動し、同時に前置詞句 *to me* が主語 *they* を飛び越えてその左側に移動し、更に動詞 *impart* が主語 *they* を飛び越えてその左側に移動し、時制を担う助動詞 *did* が生じている。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(16b) $\text{this}_j \text{ to me}_k \text{ in dreadful secrecy impart}_i \text{ they } t_i t_j t_k$

次の例も興味ある特徴を持っている。

(17a) Ham. Did you not speak to it?

Hor. My lord, I did, But *answer* made it none. (HAM 1.2.215)

(17)において、目的語として機能する名詞句 *answer* が基本となる動詞の後の位置から節頭に移動すると同時に基の位置に否定表現 *none* を残している。さらに、動詞 *made* が主語の左側に生じている（主語動詞倒置）²⁾。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(17b) $answer_j, made_i, it\ t_i, none+t_j$

1. 2. α が補語として機能する名詞句の場合

補語として機能する名詞句が節頭に移動すると同時に、その他の要素も基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動しているデータが観察される。

(18a) Pol. Your noble son is mad: *Mad* call I it, for to define true madness,
(HAM 2.2.93)

(18)において、形容詞句 *mad* が基本となる位置である直接目的語 *it* の後から節頭に移動し、同時に動詞 *call* が主語 *I* を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）。先行する節に現れている形容詞句 *mad* との対比をするため形容詞句 *mad* が前置されたものと考えられる。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(18b) $mad_j, call_i, I\ t_i, it\ t_j$

1. 3. α が動詞の場合

補語として機能する名詞句が節頭に移動すると同時に、その他の要素も基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動しているデータが観察される。

(19a) King. *Pray can I not,* (HAM 3.3.38)

(19)において、動詞 *duller* が基本となる位置 *not* の後から節頭に移動し、同時に助動詞 *can* が主語 *I* を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(19b) $\text{pray}_j \text{ can}_i \text{ I } t_i \text{ not } t_j$

1. 4. α が形容詞句の場合

形容詞句が節頭に移動すると同時に、その他の要素も基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動しているデータが観察される。

1. 4. 1. β が法助動詞の場合

形容詞句の節頭への移動と同時に、法助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

(20a) Ghost. *I find thee apt, And duller shouldst thou be than the fat weed That rots itself in ease on Lethe wharf, Wouldst thou not stir in this.* (HAM 1.5.32)

(20)において、形容詞句 *duller* が基本となる位置 *be* の後から節頭に移動し、同時に助動詞 *shouldst* が主語 *thou* を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(20b) $\text{And duller}_j \text{ shouldst}_i \text{ thou } t_i \text{ be } t_j \text{ than the fat weed}$

先行する節に現れている形容詞句 *apt* との対比をするため 形容詞句 *duller* が前置されたものと考えられる。

一方、同じ統語範疇の形容詞句が節頭に前置されているにもかかわらず、(20a)で観察されるような主語助動詞倒置が起こらない場合もあり、興味ある対比が観察される。

(21a) Old Man. 'Tis poor mad Tom.

Edg. [Aside.] And *worse* I may be yet: the worst is not So long as we can say, "This is the worst." (LR 4.1.28)

(21)において、形容詞句 *worse* が基本となる位置 *be* の後から節頭に移動しているが、助動詞 *may* は基本である主語の右側の位置にとどまったままである³⁾。この例では、先行する節に当該の形容詞句の前置を誘導する要因は観察されない。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(21b) And *worse*_i I *may* be *t*_j yet:

1. 4. 2. β が be動詞の場合

形容詞句の節頭への移動と同時に、*be* 動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

(22a) Reg. And *more convenient* is he for my hand Than for your lady's.
(LR 4.5.31)

(22)において、形容詞句 *more convenient* が基本となる位置 *is* の後から節頭に移動し、同時に *be* 動詞 *is* が基本である主語の右側の位置から主語を超えて左側に移動している。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(22b) And *more convenient*_j *is*_i he *t*_i *t*_j for my hand

その他のデータとして以下のものが観察される。

(23a) Oth. *Rude* am I in my speech, (OTH 1.3.81)

(23b) rude_j am_i I t_i t_j

1. 5. α が副詞句の場合

副詞句が節頭に移動すると同時に、助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している。

1. 5. 1. β が be動詞の場合

副詞句の節頭への移動と同時に、be動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語動詞倒置）データが観察される。

(24a) Pol. My lord, he's going to his mother's closet. Behind the arras I'll convey myself To hear the process. I'll warrant she'll tax him home, And as you said, and *wisely* was it said, (HAM 3.3.30)

(24)において、副詞句 *wisely* が基本となる動詞 *said* の後から節頭に移動し、同時に *be* 動詞 *was* が主詞の左側に生じている（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(24b) wisely_j was_i it ti said t_j

その他のデータとして以下のものが観察される。

(25a) Ros. We coted them on the way, and *hither* are they coming to offer you service. (HAM 2.2.317)

(25b) hither_j are_i they t_i coming t_j

1. 5. 2. β が動詞の場合

副詞句の節頭への移動と同時に、動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

(26a) Iago. *Long live* she so! and long live you to think so! (OTH 3.3.226)

(26)において、副詞句 *long* が基本となる位置から節頭に移動し、同時に動詞 *live* が主詞の左側に生じている。

関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(26b) $\text{long}_j \text{live}_i \text{she } t_i t_j \text{so}$

1. 6. α が前置詞句の場合

前置詞句が節頭に移動すると同時に、助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している。

1. 6. 1. β が法助動詞の場合

前置詞句の節頭への移動と同時に、法助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

(27a) King. Farewell, and let your haste commend your duty.

Cor., Volt. *In that, and all things, will* we show our duty. (HAM 1.2.40)

(27)において、前置詞句 *in that, and all things* が基本となる節の最後の位置から節頭に移動し、同時に助動詞 *will* が主語の左側に生じている（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(27b) $\text{in that, and all things}_j \text{will}_i \text{we } t_i \text{show our duty } t_j$

その他のデータとして以下のものが観察される。

- (28a) Iago. Sir, he's rash and very sudden in cholera, and happily may strike at you--provoke him that he may; for even *out of that will* I cause these of Cyprus to mutiny, (OTH 2.2.274)
- (28b) out of that_j will_i I cause these of Cyprus to mutiny t_j
- (29a) Reg. I entreat you To bring but five and twenty; *to no more Will* I give place or notice. (LR 2.4.248)
- (29b) to no more_j will_i I t_i give place or notice t_j
- (30a) Mess. *Within this three mile may* you see it coming; (MAC 5.5.36)
- (30b) within this three mile_j may_i you t_i see it coming t_j
- (31a) Iago. *With as little a web as this will* I ensnare as great a fly as Cassio. (OTH 2.1.168)
- (31b) With as little a web as this_j will_i I t_i ensnare as great a fly as Casio t_j
- (32a) Alb. Shut your mouth, dame, Or *with this paper shall* I [stopp] it. (LR 5.3.156)
- (32b) With this paper_j shall_i I [stopp] it t_j

1. 6. 2. β が相の助動詞の場合

前置詞句の節頭への移動と同時に、相の助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

- (33a) Mar. Thus twice before, and jump at this dead hour, *With martial stalk hath* he gone by our watch. (HAM 1.1.66)

(33)において、前置詞句 *with martial stalk* が基本となる節の最後の位置から節頭に移動し、同時に助動詞 *hath* が主語の左側に生じている（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(33b) With martial stalk_j hath_i he t_i gone t_j by our watch

その他のデータとして以下のものが観察される。

(34a) Macb. If't be so, *For Banquo's issue* have I fil'd my mind, (MAC 3.1.64)

(34b) for Banquo's issue_j have_i I t_i fil'd my mind t_j

(35a) Edm. *To both these sisters* have I sworn my love; (LR 5.1.55)

(35b) to both these sisters_j have_i I t_i sworn my love t_j

1. 6. 3. β が態の助動詞の場合

前置詞句の節頭への移動と同時に、態の助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

(36a) Edg. Y're much deceiv'd. *In nothing* am I chang'd But in my garments.
(LR 4.6.9)

(36)において、前置詞句 *in nothing* が基本となる節の最後の位置から節頭に移動し、同時に助動詞 *am* が主語の左側に生じている（主語助動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(36b) in nothing_j am_i I t_i chang'd t_j

1. 6. 4. β が迂言助動詞 *do* の場合

前置詞句の節頭への移動と同時に、迂言助動詞 *do* が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語助動詞倒置）データが観察される。

(37a) Ghost. Upon my secure hour thy uncle stole, With juice of cursed hebona

in a vial, And *in the porches of my ears* did pour The leprous distilment,
(HAM 1.5.63)

(37)において、前置詞句 *in the porches of my ears* が基本となる位置 *the leprous distilment* の後から節頭へ移動し、同時に動詞 *pour* の時制を担う部分が動詞の左側に生じている。完全な形ではないは、主語助動詞倒置の変種と考えられる。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(37b) And in the porches_j of my ears did_i (thy uncle) pour t_i The leprous distilment t_j

1. 6. 5. β が動詞の場合

前置詞句の節頭への移動と同時に、動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語動詞倒置）データが観察される。

(38a) [P.] Queen. *To desperation* turn my trust and hope, (HAM 3.2.218)

(38)において、前置詞句 *to desperation* が基本となる節の最後の位置から節頭へ移動し、同時に動詞 *turn* が主語の左側に生じている（主語動詞倒置）。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(38b) to desperation_j turn_i my trust and hope t_i t_j

1. 6. 6. β が目的語名詞句の場合

前置詞句が主語と動詞の間に移動するのと同時に、動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している（主語動詞倒置）興味あるデータも観察される。

(39a) Lod. Myself will straight aboard, and *to the state* This heavy act with heavy heart relate. (OTH 5.2.371)

(39)において、前置詞句 *to the state* が基本となる節の最後の位置から節頭に移動し、同時に目的語 *this heave act* が動詞の後の位置から動詞 *relate* の左側に生じている（主語助動詞倒置）。

関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(39b) $to\ the\ state_j; this\ heavy\ act_i\ with\ heavy\ heart\ (myself)\ relate\ t_i\ t_j$

1. 7. α が否定表現として機能する副詞句の場合

否定の意味を持つ副詞句が節頭に移動すると同時に、助動詞が基本となる位置から主語を飛び越えてその左側に移動している。

(40a) Macb. To-morrow, as he purposes.

Lady M. O, *never* Shall sun that morrow see! (MAC 1.5.61)

(40)において、否定の意味を持つ副詞句 *never* が基本となる助動詞と動詞の間の位置から節頭に移動し、同時に助動詞 *shall* が主語の左側に生じて（主語助動詞倒置）、更に目的語名詞句が動詞 *see* の左側に生じている。関連する部分の構造は、以下と考えられる。

(40b) $never_j; shall_i\ sun_k\ that\ morrow\ t_i\ t_j\ see\ t_k$

2. 倒置を引き起こす要因

本節において、ある要素が節頭に移動することにより倒置現象がみられるデータを分析し、倒置を引き起こしている要因について基本的な説明を試み

る。

倒置を引き起こす要因としてよく説明に使われる原則は「情報」に関するものである。先行する情報との同一性または関連性により後続する節の特定の要素がその節の頭に移動することにより、旧情報から新情報への情報の流れに関する原則が守られることになる。

(41) 新情報と旧情報

旧情報 (old/known information) : 会話の当事者 (話し手と聞き手) によって前提とされ、共有されている情報

新情報 (new/unknown information) : 聞き手にとって新しい情報

(42) 情報の流れの原則

強調ストレスや形態的にマークされた焦点要素を含まない文中の要素は、通例、より重要でない情報からより重要な情報へと配列される。

以下、情報の流れの観点から、節頭への要素の移動について考察する。

まず、先行する節がもつ情報との同一性のため、後続する節において旧情報となり節頭に移動する場合として以下のデータがある。先行する節がもつ同一性を二重下線を付すことにより示す。

(43) Hamlet. Look you, these are the stops.

Guil. But *these* cannot I command to any utterance of harmony. (HAM 3.2.361)

(44) Oth. My life upon her faith! Honest Iago, Honest Iago, *My Desdemona* must I leave to thee. (OTH 1.3.295)

(45) Oth. I gave her such a one; 'twas my first gift.

Iago. I know not that; but *such a handkerchief* (I am sure it was your

- wive's) did I to-day See Cassio wipe his beard with. (OTH 3.3.438)
- (46) King. O, speak of that, *that do* I long to hear. (HAM 2.2.50)
- (47) Pol. Your noble son is mad: *Mad call* I it, for to define true madness,
(HAM 2.2.93)

次に、先行する節がもつ情報との語彙的関連性のため、後続する節において旧情報となり節頭に移動する場合として以下のデータがある。先行する節がもつ語彙的関連性を二重下線を付すことにより示す。

- (48) [1.] Serv. Hold your hand, my lord! I have serv'd you ever since I was a child; But *better service have* I never done you Than now to bid you bold.
(LR 3.7.74)
- (49) Ham. No, nor mine now. [To Polonius.] My lord, you play'd once i' th' university, you say?
Pol. *That did* I, my lord, and was accounted a good actor. (HAM 3.2.101)
- (50) Ham. Did you not speak to it?
Hor. My lord, I did, But *answer made* it none. (HAM 1.2.215)
- (51) Ghost. I find thee apt, And *duller shouldst* thou be than the fat weed That rots itself in ease on Lethe wharf, Wouldst thou not stir in this. (HAM 1.5.32)
- (52) Old Man. 'Tis poor mad Tom.
Edg. [Aside.] And *worse* I may be yet: the worst is not So long as we can say, "This is the worst." (LR 4.1.28)
- (53) Reg. I entreat you To bring but five and twenty; *to no more Will* I give place or notice. (LR 2.4.248)

以下は、先行する節に情報の関連性を示す内容が含まれているが、具体的な語句が存在しない場合である。

- (54) Hor. ...*all this can* I Truly deliver. (HAM 5.2.385)
- (55) Lady M. *This have* I thought good to deliver thee, my dearest partner of greatness, (MAC 1.5.10)
- (56) Iago. *More of this matter cannot* I report. (OTH 2.3.240)
- (57) Mar. Who is't that can inform me?
Hor. *That can* I, (HAM 1.1.80)
- (58) Oth. *That handkerchief Did* an Egyptian to my mother give; (OTH 3.4.55)
- (59) Hor. *This to me In dreadful secrecy impart* they did, (HAM 1.2.206)
- (60) Reg. And *more convenient is* he for my hand Than for your lady's. (LR 4.5.31)
- (61) Pol. My lord, he's going to his mother's closet. Behind the arras I'll convey myself To hear the process. I'll warrant she'll tax him home, And as you said, and *wisely was* it said, (HAM 3.3.30)
- (62) Ros. We coted them on the way, and *hither are* they coming to offer you service. (HAM 2.2.317)
- (63) King. Farewell, and let your haste commend your duty.
Cor., Volt. *In that, and all things, will* we show our duty. (HAM 1.2.40)
- (64) Iago. Sir, he's rash and very sudden in choler, and happily may strike at you--provoke him that he may; for even *out of that will* I cause these of Cyprus to mutiny, (OTH 2.1.274)
- (65) Alb. Shut your mouth, dame, Or *with this paper shall* I [stopple] it. (LR 5.3.156)
- (66) Edm. *To both these sisters have* I sworn my love; (LR 5.1.55)
- (67) Lod. Myself will straight aboard, and *to the state* This heavy act with heavy heart relate. (OTH 5.2.371)

3. まとめ

本論文では、シェイクスピア英語に観察される倒置構文を分析するためのパイロット的試論として、戯曲37編から4大悲劇を取り上げ、その派生構造と機能について考察を加えた。具体的分析を通して、節頭へ移動する要素と、当該要素以外の要素の基本となる位置からの移動の特徴的パターン及びその派生構造と倒置を引き起こしている機能的要因を明らかにすることができた⁴⁾。本稿の枠組みである文献学的または伝統的文法を超え、生成文法理論（ミニマリストプログラム）の枠組みで倒置現象をとらえるには、移動（倒置）を引き起こす素性および派生構造をさらに詳細に検討する必要があるので、稿を改めて取り組む予定である。

注

- 1) 本論文では、倒置要素が1つのみの場合や、否定表現の前置、*so* や *then* の前置、*there* や *here* 構文」に伴う倒置現象は扱わない。
- 2) (17b) の D構造において、*none + answer* を仮定しているが、本稿の分析の妥当性についてはさらに検証が必要である。
- 3) (20a) と (21a) の違い、形容詞の節頭への前置と同時に他の要素が倒置されるかされないかについては、同時に生じている倒置を引き起こすメカニズム（素性等）を理論的に検討する必要がある。
- 4) 節頭へは、主要な統語範疇である名詞句、動詞句、形容詞句、副詞句、前置詞句がその全部又は一部が移動することが観察された。

参考文献

- 荒木一雄・中尾祐治（1980）『シェイクスピアの発音と文法』。東京:荒武出版。
 荒木一雄・宇賀治正朋（1984）『英語史ⅢA』。東京:大修館。
 Blake, N. F. (2002) *A Grammar of Shakespeare's Language*. New York: Palgrave.
 井上和子（1978）『日本語の文法規則』。東京：大修館書店。
 Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III Syntax. London:

George Allen & Unwin.

前島儀一郎 (1977) 『シェークスピア・聖書の語法』. 東京: 研究社.

小野 捷・伊藤弘之 (1993) 『近代英語の発達』. 東京: 英潮社.

Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*, 2nd ed. Cambridge, England: Cambridge University Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvick (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.

宇賀治正朋 (2000) 『英語の歴史』、東京: 開拓社.

Warner, A. R. (1993) *English Auxiliaries: Structure and History*. Cambridge, England: Cambridge University Press.